

オンライン授業からの気づき — 語学教育 —

MEMBER

加藤 映子
大阪女学院大学学長

藤原 三枝子
甲南大学国際言語文化センター長
(2021年3月現在)

三谷 裕美
獨協大学法学部准教授、
全学共通カリキュラム運営委員

川口 恵子
芝浦工業大学工学部教授、
工学部長補佐
(2021年3月現在)

山田 健太
専修大学文学部教授、
広報・情報委員会
大学時報分科会委員

対面授業からオンラインへ 各大学の対応と取り組み

山田 今からちょうど1年前くらいに、新型コロナウイルスの影響で各大学がさまざまな判断を強いられ、対応に追われるという事態が始まりました。感染拡大は、ワクチン接種の開始と共に、収束に向かう期待感もありますが、まだまだご苦労が続いていることでしょう。本日は、特に対面での授業が求められる語学教育に焦点を絞りお話しいただきありがとうございます。まずは、語学教育に携わる先生方がこの1年、感じてきたことを自己紹介とともに教えてくださいと思います。

三谷 私は、獨協大学法学部に所属しています。獨協大学には、全学共通カリキュラムがあり、私はその外国語科目群英語部門の代表を2019年度、2020年度の2年間にわたって務めてきました。全学共通カリキュラムの英語は、基本的に英語を専門としない学生を対象とした英語プログラムで、外国語学部ドイツ語学科、フランス語学科、経済学部3学科、法学部3学科の3学部8学科を対象としています。かなり大きなプログラムで、通年換算350コマの授業、90名近い専任・非常

勤の教員がいます。大きなプログラムなので、オンライン授業になった際、どれだけ大変なことになるかと心配しましたが、それほど大きなトラブルもなく移行できたという印象です。

川口 私は、芝浦工業大学工学部土木工学科に所属する英語教員です。また、工学部長補佐を務めています（2021年3月現在）。本学は4学部あり、その中で工学部の学科数が一番多く、9学科あります。工学部の英語プログラムとしては、1学年約1000人で、年間で200コマ程度開講しています。統一シラバスを用いて足並みを揃え、芝浦工業大学としての教育の質の保証を大切にしています。オンライン授業になり、統一シラバスに基づいた共通のテストや宿題を準備することは大変でしたが、いったん準備できてしまえば、そのあとは比較的スムーズに進めることができました。

教員それぞれのICTスキルが問われることとなった1年間

加藤 大阪女学院大学の学長をしております。本学は、

1学部の定員が150名、総勢でも800名程度という非常に小規模な大学です。その良さを活かして、「英語を学ぶ」のではなく「英語で学ぶ」ことをカリキュラムに据えています。本学では、iPadのデジタル教科書を導入し、全員が使用しているため、オンライン授業に切り替わった時に大きな利点となりました。春学期をどこまでオンライン授業にするかということ、先生方のICTスキルに関する研修、秋学期は全面对面授業に切り替えるかどうかの判断などに苦慮してきました。

特に研修においては、英語話者・日本語話者の先生を分けて行うなど、細やかな対応をしてきました。

藤原 私はドイツ語の教員ですが、現在は国際言語文化センターという全学の外国語教育を担うセンターで所長を務めています（2021年3月現在）。オンライン授業への移行において最も大変だったのは、国際言語文化センターの約740クラスを担う20名の専任教員と多様な国籍の非常勤講師145名が、オンライン授業に対応するためのセンターとしての指針作りとその周知、そしてICTスキルをどのように身につけていただくか、ということでした。



山田 ありがとうございます。どの大学も新型コロナウイルスの感染対策として、文部科学省や自治体に従い、やむなくキャンパスを閉め、オンライン授業へと移行しました。各大学、試行錯誤しながら学生にとって何がベストなのかを模索してきたと思います。その中で行われることとなったオンライン授業については、現在まだ検証途中であり、議論百出だと思えます。次に、オンライン授業における予想しなかった教育効果や教育手法上の新たな気付きなど、コロナ禍がもたらした教育におけるプラスの側面についてお伺いできればと思います。特に語学に関わる先生方においては、非常にユニークな教育を実践されていると存じていますので、さまざまな示唆をいただければと考えています。こうした経験を共有し、それぞれ次のステップへとつなげていけたらと思います。

実際に顔を見てつながる 対面授業の温かさ

藤原 これまで対面授業が当たり前であった語学教育においても、オンラインでの対応を余儀なくされました。後

期の授業においては、原則対面という形に戻りましたが、オンライン、対面とどちらも体験してみても、毎回である必要はないかもしれませんが、やはり、教室で皆が実際に顔を合わせることはとても重要だと感じました。前期はZOOMを使って授業を行ったのですが、顔出しをしない学生、ZOOMにつながらない学生が一定数存在しました。後期になって初めて対面で授業を行った時、学生たちが笑顔でLINEの交換を行っている姿がとても印象的でした。以来、あたたかなクラスの雰囲気ができあがりました。その後、教室の関係で再びZOOMでの授業に移行しましたが、顔出しをためらう学生は少なくなり、お互いに助け合う場面が見受けられるようになりました。教師にとっても学生にとっても教室という同じ空間で直接顔を合わせる経験は協働学習にとって重要だと実感しました。

オンラインならではの つながり方と可能性

加藤 昨年の4月にまず行ったのは、学生の自宅にインターネットの環境が整っているかどうかの調査です。その



藤原 三枝子氏

結果、100名程インターネット環境がない学生がいたため、モバイル型のWiFiを自宅に送り、環境を整えました。オンライン授業を行ってみての感想としては、オンラインならではの工夫や可能性も多くあると感じたことです。オンラインで試験的にやってみたグループワークの発表では、学生たちは、教室に来て行うのと変わらない見事なグループプレゼンテーションを見せてくれました。また、その



加藤 映子氏

中でなぜかZoomに入れない学生がいたのですが、その学生とスマートフォンでつながっている学生が、ビデオ通話を通して授業を中継し、その学生も無事に発表することができました。学生の連携プレーに驚きました。

山田 先ほどのお話の中で大阪女学院大学ではiPadを配布しているということでしたが、もともとオンライン授業が存在していたのでしょうか。

加藤 オンライン授業は初めてです。2012年からiPadを導入していますが、デジタル教科書として使ってきました。今回オンライン授業になった際に、全員デバイスを持っているという状況は大きな助けとなりました。

語学教育における

オンラインのメリットと気付き

川口 本学でも、まず受講環境を整えなければならぬという話になりました。工業系の大学なので多くの学生はパソコンを持っていますが、全員にアンケートを取り、持っていない学生にはパソコンを貸与しました。本学は首都圏に位置するので、感染予防の観点より、前期も後期も基本的にはオンライン授業でした。オンライン授業のメリットとしては、語学の授業では非常に集中度が増すことが感じられました。また、英語を話すシチュエーションなどがある際にも、周りに人がいない環境でのオンライン授業では、学生が緊張感や自意識から解放されているためか、英語でも積極的に発言するということがわかりました。

一方、監督できない中でいかに期末試験や小テストを行うかということが課題になりました。対面の場合には監督ができるので、学生は同じ条件で試験を受けますが、オンラインではそういうわけにはいきません。そのため、知識を問うような問題ではなく、理解を問うような問題を出さなければいけないということに気づきました。

三谷 獨協大学では2011年からLMSが導入されており、2020年春にZoomのアカウントが大学から全教員へ付与されました。そのため、Zoomや電子教科書などを使いこなせる先生方は、かなり充実した授業ができたようです。教員にとったアンケート結果では、授業目標を達成できたとの回答が8割となり、予想よりも良い結果が得られています。

個人的には、経済学部3年生の必修の授業で、グループプロジェクトを通年で行うものがあり、遠隔でどのようにするのか悩みました。Zoomとブレイクアウトルームを使用して発表を行いました。グループとしてできあがってきたものは、例年よりも質が高かったほどです。その理由としては、例えば細かい指示のようなのをLMSに載せておいたことで、それを自分で確認

し、集中して理解を深める時間が持てたことが考えられます。発表の内容も整っており、中身も深かったのが驚きであり、喜びでもありました。対面授業が通常になった際、このように集中した時間をこの先も持てるかが、今後の課題になると思います。

山田 授業へのコミット度が上がったのではないかという印象を、私も持っています。新たな取り組みや気付きについてはいかがでしょうか。

学内のIT環境の整備と 教員、学生のスキルアップ

藤原 本学ではOffice 365を導入しており、そのSharePointに月曜日から土曜日までのクラスごとにフォルダーを作成し、各教員が作ったデータをアップロードできるようにしました。各ファイルのリンクを大学のLMSに貼ることで教員は多様なデータを学習者に提供することができました。これは大学の取り組みとしてとてもよかったですと思います。

また、後期からは、教室のキャパシティーの関係で対面



とオンラインが混在する形になりました。学生は自分のデバイスを大学に持ち込んで学内に設置されたスポットを利用してオンライン授業に参加します。この経験から、必ずしも大学がハードを買い揃えなくとも、学生がそれぞれのデバイスを用いて授業に参加できることがわかりました。令和3年度からは、無線LANの整備、ソフトウェアの包括的ライセンスの取得・提供等により、BYOD (Bring Your Own Device)を1年生のリスキングの授業を実施する予定です。

山田 スマートフォンで授業に参加できるならば、幅が広がりますね。芝浦工業大学は、工業系ということもあり、学生の多くはパソコンを持っているというお話がありました。いかがでしょうか。

川口 そうですね。令和3年度入学生から、パソコンの必携化をスタートし、全員、パソコンとヘッドセットを持って大学に来てもらう予定です。学内のいろいろなところで、自分のパソコンで授業を受けることが可能になるように、整備を進めています。

山田 大学におけるIT環境は、新型コロナウイルスの影響でスピーディーに大きく変わった点でしたね。私の



三谷 裕美氏

所属する専修大学にも言えることですが、規模が大きくなるとなかなか難しい部分もあると思います。獨協大学ではいかがでしょうか。

三谷 4月以降、学内Wi-Fiの需要が高まることが予想されるため、現在、アクセスポイントを増設中です。獨協大学では、対面授業を基本としながらも、高齢の家族と同居しているなどで、大学に来ることができない学生にも

対応できるようにしています。最近、教室にオンライン授業用のカメラが導入され、授業の様子を録画、あるいは同時配信できるように整備したので、あとは先生方に使いこなしていただければと思っています。

加藤 教員、学生ともにITスキルは大きくアップしたと思います。否が応でもやらざるを得ないという状況で、個人個人が取り組まれた結果でしょう。オンラインから対面、対面からオンラインといった切り替えも、スムーズにできるようになりました。

柔軟なプログラムの在り方と 評価の工夫の必要性

山田 語学の授業では、知識よりも理解を目指す内容になったというお話も出ましたが、教え方やその中身についてはどのような変化があったのでしょうか。

藤原 オンラインと対面、それぞれの良さを意識しながら授業を組み立てることができたと感じています。知識を伝えることや、反転授業で先に動画教材などを見て学習してもらうという部分では、オンラインは適して

います。スピーキングなどは対面で行う良さがありますので、アンケート調査の結果、先生方はご自身の判断で使い分けをされていました。

三谷 教室でテストができなくなったことで、評価方法が変わったのは、この1年の大きな変化だったと思います。わかっているかどうかを○か×やABCで選ぶのではなく、例えば読んだものをもとに自分の意見を展開するとか、要約するなどの形式に変化したため、自分の意見を述べたり表現したりする機会は増えたはずです。先生方からは、フィードバックが大変だったという声も多くありました。

川口 確かに評価の方法は大きく変わりました。ただ語学の場合は、理解を問うことももちろん重要ですが、仕事上でのとっさの場合など、すぐに言葉を使うことができないという意味がないという場面も多いため、知識をつけること、それを問うという評価方法も必要だと感じています。理解と知識の双方を問い、評価する工夫を、これからしていかなくてはいけないと考えています。

加藤 本学の場合は、インプットとアウトプットということをこの30年間ずっとやってきていますので、評価方法自

体が大きく変わったというわけではありません。3、4年前からはEnglish CentralというWebを介した英語力育成プログラムやXreadingという多読のプログラムなども導入していますので、以前から取り組んでいたことと、今回のオンライン化がうまく融合した面もあります。

オンデマンドとリアルタイム 授業における使い分け

山田 オンライン授業には、リアルタイムのオンライン授業とオンデマンドの反復型授業的なものと2種類あると思いますが、どのように使い分けていたのかお聞かせいただけますか。

加藤 本学の場合は先生方にチョイスしていただきました。語学の先生はほとんどリアルタイムで授業をされていたと思います。オンデマンド型で準備されていた先生もいらつしやいますが、本学の場合、1年生の英語必修科目の授業は自分たちで教材を作り、デジタル教科書となっているため、対面とそれほど変わらない授業を提供できたと思っています。



川口 恵子氏

三谷 本学でも先生方に選択していただく形で行いました。科目によって差があり、やはりリスニングとスピーキングに関しては、リアルタイムを選択した先生が多く、ライティングに関しては、オンデマンドを選択する先生が多かったです。ライティングの先生からは、オンデマンドで行った授業の方がこれまでよりも提出された課題の質が高かったという意見もありました。

川口 語学の授業に関しては、すべてリアルタイムで行いました。グループワークやインタラクティブが非常に大切で、オンデマンドではその機会を逸してしまうと考えたためです。学生の発言に対して教員がどう反応するのか、それを別の学生が聞いてどのような刺激を受けるのかといったことが語学教育には欠かせないと思います。語学はリアルタイムでの授業をお願いしました。

キャンパスに来ることができない 1年生へのケア

山田 この1年はある意味で絆を築きにくかった1年でしたが、学生、特に新生の様子についてもお聞かせください。

加藤 春学期に関しては学生同士の交流ができなかったというのが、特に1年生にとっては大変だったと思います。すべて英語で授業が行われるので、最初は先生の言っていることも、課題が何なのかも聞き取ることができない学生が多いのです。そういった際、教室での授業であれば、隣の学生に「わかった？」と聞き、隣の学生が「わからなかった」と答え

れば、理解できなかったのは自分だけではなかったということがわかり、安心できます。しかし、オンラインではお互いの顔が見えず、不安を抱えた学生は多かったと思います。

藤原 1年生と上級生では、この状況の大変さが全く違ったと思います。アンケート調査の結果、1年生は、何かができないことを自分のせいにしてしまう傾向があり、自責の念にかられて身体的、精神的にも参ってしまふということが少なくないことがわかりました。友だちが作れない、友だちに聞けないという状況でストレスが溜まってしまふということが調査からわかっていますので、メンタルケアをどうしていくのかも課題です。

川口 登校しないと他の学生と交流する機会がなくなるので、人間形成的には問題があるのではないかという話は大学全体で出ており、なるべく登校の機会を作るべきだという認識は共有しています。

大学で語学を学ぶことの 意義と今後の在り方

山田 オンライン授業やオンデマンドを使って、各大学

がいろいろな手法、形で教育の在り方を工夫してきたと思います。また、さまざまなツールを用いて情報共有もしやすくなりました。一方で、オンデマンド授業は、知識を向上させるためには効果的ですが、大学の授業とは少し異なるのではないかという意見などもあります。その辺りのご意見も伺えますでしょうか。

加藤 ある大学のAI研究者が、あと5〜6年で語学教育はAIにとって代わられるとおっしゃっていました。例えば、アバターのようなものが出てきて、会話をしてくれるような技術が開発されるのは時間の問題だと。そうなる私たちが大学で語学の授業を行う意味は何なのかということが問われてくると思っています。本学では、語学教育とは何かということについてずっと考えてきましたが、やはり、自分が相手に何を伝えるのかということが大切なのではないかと。人と対話することで得られる気付きが人間にとっては重要だと思っています。ただ単に語学力を身につけるといふことであれば、今後テクノロジーが勝ってくる可能性は十分にあると考えています。

三谷 私は、獨協大学の外国語教育研究所の主任研究

員も兼任しているのですが、昨年11月にちょうど「AI時代の外国語教育を考える」という講演会を開催し、言語学者の川添愛先生に講演をお願いしました。その中で、確かに目的が限定される会話、例えばレストランの予約やホテルの受付などの会話は、AIで対応し得るレベルにある程度達しているけれど、日常で交わす何気ない会話には、やはりまだAIでは対応できないだろうというお話がありました。先ほど加藤先生がおっしゃっていたように、語学教育は人間同士のインタラクションが基本ですから、語学教育が完全に機械にとって代わられるということは、まだずいぶん先のことになるだろうと考えています。

山田 では、力を入れていくべきなのは、こういった点になるとお考えですか。

三谷 もちろん人間ですので、相手の気持ちを汲みながらいかに説得するか、共感を持ち得るかなどということにおいて、言語教育の原点回帰を考える時期に来ているという気がします。情報の交換だけでなく、文化的背景や相手のことを理解しようとする気持ち、自分のことをどのように相手に伝えるかなど、コミュニケーションの

在り方も問われてくるのだと思います。

世界との新しいつながりと

これからの言語教育

藤原 コロナ禍の中、ICTの利用が大きく広がったことで、世界中の人と容易につながることができるようになりました。それを大学教育でももっと活用したいと考えています。すでに他の大学でもやっておられるかもしれないませんが、本学でも語学教育において、「しゃべり場」を設けて世界とつながる機会を増やしていこうとしています。すでに昨年12月に、フランスのネイティブの方10人と、本学の学生7人がZoomでつながり意見交換をしました。ドイツ語でもドイツのダルムシュタット工科大学の日本語学習者と本学のドイツ語学習者の「しゃべり場」を企画しています。Zoom等を使って、学生たちにオーセンティックな交流の場を提供していきたいと思っています。

山田 私の周りでも、研究者や実務家同士のしゃべり場が設けられています。そうすると世界中の専門家が

集まることができたりして、可能性は大きく広がってきますよね。

加藤 本学では今年度、元外交官の教員が着任されました。その方には英語のトピックベースの授業も担当していただいています。キャリアを生かして世界各地の専門分野の方々とつながりをお持ちなので、いろいろな方がゲストとして登場してくださり、非常に有意義な授



山田 健太氏

業が展開できました。わざわざ大学に足を運んでいた
だかなくてもゲストスピーカーとしてお呼びできるので、
そういったことから得られる教育効果、可能性は活
かしていけたらと考えています。

川口 本学は、SGU（スーパーグローバル大学）に採択
されており、グローバルに活躍したいという学生が多く
入学してくるようになりました。エンジニアとしての国
際性の涵養を目指しているので、英語だけができて
意味がありません。工学という文脈での言語修得が必
要で、正課の英語授業の他に、海外語学研修や、海外の
研究室と共同のテーマで学ぶグローバルPBL（課題解
決型学習）の機会が提供されています。そこで、私たち
語学教員の重要な役割は、言語だけでなく、コミュニ
ケーションとは何か、相手の文化を理解するとはどうい
うことかなども教えることだと思っています。

山田 本日は語学教育に携われている先生方にお集ま
りいただき、それぞれの大学での取り組みや工夫、これ
からの授業についてなど、さまざまな実例とご意見を伺
うことができました。学校の規模が違えば対応も違っ
てきますし、専門によってもその学びの方法は異なりま





す。コロナの影響によって変わったこと、また気づきも多い1年だったと思います。ここで得たものを、我々はこれからの教育にしっかりと活かしていかなければとあらためて感じました。本日は貴重なお時間をありがとうございました。